子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2014年7月　NO.180

[もくじ]

2～3　素展～Resources～開催に向けて…上田祐嗣
4～5　演劇でないとならない理由…岡村実記
6～9　地域に根差す活動の未来―CONNECT 2 CREATE―…筒井亮太
10～11　言葉の現場から46　褒めの笑いのなぞ①…広井護
12～13　高知市文化振興事業団5月～6月の事業から
14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「キリン」山口美月

公益財団法人高知市文化振興事業団

素展（そてん）～Resources～開催に向けて

上田　祐嗣

画楽ができて十年になります。十年一昔といいますが、はるか昔のことのようでもあり、昨日のことのようでもあるふしぎな感覚です。

私たちの会社は、営利法人として一九九〇年に設立。創業理念は「愉快製造工場」。創業時のパンフレットには舌を出したアインシュタインの肖像をアンディ・ウォーホル風に描き起こしたイラストを象徴的に使っています。私たちはその時から常識と決別し、本当の意味での「愉快が充満した社会」を実現するために働くことが、私たちのミッションであると意思表示したのです。

以来、市町村や県から障害のある人の社会参加を目的とするイベントやデザインの仕事を通じて障害のある当事者の方々に会い、話す機会を持ちました。そういった機会の中で、見えない人や聞こえない人がそれぞれの持つ感覚で感じたことをどのように理解し、表出するのかに関心を持ち、百人百様の個を尊重することが大切だと気づかせてもらいました。

〈アートセンター画楽の開所〉

二〇〇一年からエイブルアートジャパンの支援を受けながらトヨタエイブルアートフォーラムin高知を開催し事務局をつとめました。三年間にわたるプロジェクトでしたが、障害のある人とアート、そして社会の関わり方について考え取り組む他県の団体と出会い、高知にも「彼ら（ユニークで、良い意味でアンバランスな人たち）」が、通うことの出来る常設のアートセンターの必要性を感じ、フォーラム終了後の翌二〇〇四年、現在地にアートセンター画楽を設置しました。

私たちはそれ以来、障害のある人たちとアートを通じた関わりの中で、彼らにしか持ち得ない表現の数々に出会い、目の当たりにしてきました。日常の些細な幸せから生まれ、誰のために、何のためにといった目的なく沸き上がり溢れ出すかたち。そこには私たちが見落としがちな、大切にしなければならないことが隠れていると感じます。

画楽が生まれてから十年、画楽劇場では毎日へんてこおかしいことが生まれます。画楽はアートセンターですから、メンバーはみんな何らかの作品をつくりに通ってくるのですが、この劇場で繰り広げられる愉快に感じることのほとんどは、本人のおもしろさからくるパフォーマンスとして消えてしまうものです。立ち会えるスタッフのみが手にするご褒美といえます。

西部警察マニア

刑事部長　高橋　征弥

「昭和の頃みよった」と西部警察をみながら「わかいねー、わかすぎる石原裕次郎さん」「うわー火事、ダイナマイト、消さないかん」とそのシーンの中に自分がいるように大騒ぎ。特に犯人の逃走や爆発シーンになると笑いと楽しさが絶好調となり、赤信号無視をする逃走犯に向かって「止まりなさーい」と叫ぶのであります。
昭和のスターや刑事ドラマをこれからも愛し続けます。

S君は西部警察が大好きで「ほらみて！大門警部のサングラス、石原裕次郎のタバコとブランデーグラス描きました！犯人が逃げる時に乗った日産のトラック！」といいながら何も見ずに大胆な構図で絵を描いていくのですが、いかんせん絵としてみたら一見残念な出来映え。ある日、スタッフがYouTubeで西部警察を検索して、「S君どのシーン描いたが？」と尋ねると自分でどんどん検索して、「あったこれが日産のトラック！」といって教えてくれました。確かにそのシーンを見れば日産の幌付きのトラックがカーチェイスを繰り広げています。

この面白さは彼の絵を単に額装しても伝わりません。この愉しさを独り占めすることなく、なんとか皆さんにお伝えすることが出来ないかとスタッフが知恵をしぼって出来たのが、西部警察手帳などのアートグッズです。

彼らの作品の制作支援をするだけでなく、その面白さをどうやって伝えるかが私たちのミッションであると考えています。

〈画楽プロジェクトから素展へ〉

これまで「かるぽーと」を会場に彼らの作品を紹介する展覧会を、二〇〇七年以来三度開催してきました。ここ数年、この分野への関心はかつてない高まりを見せ、各地の美術館などでも障害のある人々の手による様々な切り口で生まれた作品の展覧会が企画され、ハッとする驚きや気づきをもたらしています。それはなぜなのでしょう？

現在の日本は、表面的な景気の変化は見られるものの、根底にある拡大拡張を前提とする近代資本主義社会のきしみ、少子高齢化による生産年齢人口の減少を背景とした、縮小を前提とした低成長型社会への順応がうまく進まず、社会を構成する市民の孤立や貧困、無関心など解決の求められる課題が山積しています。

障害のある人々から生みだされるアートは、功利や利己、利益、便利など利という言葉から遠く離れた〝真摯な表現〟と言えます。これらの根源的な本能に基づいた表現は、私たちに大切な何かを気づかせてくれます。

私たちは、日常をより美しくする行為としての芸術、とりわけ障害のある人たちのアート、また彼らに関わり寄り添う人たちによる様々な取り組みが、問題を解決するためのヒントとなりえる「Resources（資源）」であり、それを多くの人と分かち合うことが、局面の打開に有効であると感じています。

今回私たちが企画する「素展（そてん）～Resources～」では、現代社会の抱える課題を克服した未来のVISIONを夢見て、人の生きる意味や大切にすべき価値観を考えてみたいと思います。

また、全国からそのような思いを共有する仲間（施設や作家、支援者）が一同に会して、それぞれの持ち味を活かした作品展示はもちろん、取り組みの紹介や、プレゼンテーション、商談など…見本市のような役割も担う展覧会にしたいと考えています。

解決していくためのヒント・Resources（資源）となり得る作品やアイデアを持ち寄り、縦糸、横糸にして織り上げる。織り上がった見たことのない布は、感動と様々な気づきを与えてくれることと思います。

うえだ　ゆうじ（本名：善道）

一九六三年　高知市生まれ
アートセンター画楽代表。一九八八年、高知大学教育学部卒業、高校美術教員免許取得。一九九〇年、有限会社ファクトリー設立、一九九五年、同社代表取締役就任、現在に至る。

◆高知県発達障害児・者支援体制整備検討委員会／高知県広域特別支援連携協議会委員（二〇〇五年～二〇〇七年）

◆高知県発達障害者支援開発事業企画・推進委員会委員（二〇〇八年～）

有限会社ファクトリーの業務
・デザイン・行政コンサルタント
・集落再生等の地域計画
・認知症グループホーム・ヘルパーステーション・デイサービスセンター等の介護保険サービス事業
・地域活動支援センター・児童デイサービス等の障害者支援サービス事業

演劇でないとならない理由

岡村　実記

二〇〇一年一月、ほんの小さなきっかけから高知演劇ネットワーク演会（以下、「演会」）が誕生しました。

当時、二十代の劇団の多くが同じ稽古場で練習していましたが、個人的な知り合いがいる程度で、劇団間の交流はほぼありませんでした。

「同じ場所でこんなに劇団がいて顔を合わせているのにもったいない！」と初代代表が動いたことで、演会が誕生しました。きっと代表は高知のこれから、演劇のこれからをずっと先まで見越して「0を1にするために」団体を結成したのでしょうが、当時の私はそんなことなんて思いもせず、「おお、なんか楽しそう！」と思ったことを覚えています。ですが、その時に感じた「楽しそう」という感覚は今も継続していて、私を支え動かしていく原動力になっています。

現在では代表を務めることになった演会は設立して十四年。現在七劇団、約七十名が所属しており、設立当初から「演劇祭ＫＯＣＨＩ」という企画で、各劇団に毎春上演をしてもらっています。この企画もきっかけは、どの劇団も似たような時期に上演しているなら、まずは一つのパッケージとしてまとめてみよう、というところから始まりましたが、続けていく中で今年は全公演を同じ会場で、今年は公演時期を毎週末にまとめて、今年は五台山竹林寺を会場にと、少しずつ少しずつ挑戦し各劇団との繋がりを作り、高知での演劇普及にも繋げていきました。

何事も始めるのは意外に簡単だけれど、続けていくことの方が難しいと言います。よくよく思い返してみると、私の演劇人生は中学校の時に所属していた英語部で上演した「白雪姫」での継母役からスタートしました。制作一筋の今では到底考えられませんが、英語部なので台詞はもちろん英語。もう「ミラーミラー」しか覚えていませんが、何故だかちょっとした人気者に。そして高校では英語部か演劇部か迷っていたのですが、「お。なんだこの楽しそうな団体」と惹かれて演劇部へ入部。ここから本格的な演劇人生が始まり、二十数年たって現在に至ります。

少々話が脱線してしまいましたが、演会が活動を続けていく過程のなかで成長する転機となった出来事が二つあります。

一つ目はある助成金を申請した時に公開審査で言われた一言。「なぜあなた達のやりたいことにお金を出さなければいけないのか」と問われたことは今でも忘れられません。たまたま演劇に出会い、やりたいからやっている。お金をもらうために、活動する意義や理由を後から無理やりつけて体裁を整える。だから別に演劇である必要がなかった。そんな底の浅さを見透かされた思いでした。どんなに素晴らしい活動だとしても、それを全く必要としていない人に必要と認めてもらえなければ意味がない。この時から自分達の活動を理解してもらえるような「言葉」を身につけなければと強く思いました。

二つ目は公共ホールとの初の協働制作です。高知県立美術館の企画で、プロの演出家を招き地元の演劇人と作品を創るという取り組みでしたが、現在は鳥取県鹿野町「鳥の劇場」で活躍されている演出家、中島諒人さんとの出会いが演会を大きく動かし始めました。仕事が終わって稽古場に駆けつけ、連日深夜までの練習。そしてまた仕事に行き、また稽古場に行く。ひたすらこの繰り返しの毎日が三カ月。そうして高知での上演を皮切りに、富山県、静岡県、香川県、果ては韓国までと、数年の時間を共有させてもらいました。

プロは本気で私達にぶつかってきます。どこにも逃げ場なんてありませんでした。演劇と真剣にぶつかったあの時間があったからこそ、私達は次のステージに進むことができましたが、それと同時にその時出せる力を出しきってやりきったことで「もっと前に進みたい。でも両立する限りこれ以上クオリティを上げるのは限界だ」という、仕事と演劇の両立の壁にもぶち当たることになりました。けれど私達はこの高知でこのまま続けてくことを選択したのです。最初は好きだけで始めた演劇が「高知のまちづくり」に役立つのか？「劇場の空間と触れ合うことによるゆたかな生活」が高知で実現できるのか？見つめ直すきっかけにもなったのです。

この十四年、楽しいだけでは出来なかったことの方が多かったのかもしれません。そして私はよく「どうして制作をしているの？」と聞かれます。

これまでは言葉にして明確に伝えることができませんでしたが、結局「人が好きなんだ」という誰もが言いそうな単純な答えにやっと辿りつきました。

演劇には理由なく人の心を動かす力があると思っています。言葉もストーリーも分からなくても、「なんか面白かった」というのは、自分の目の前で誰かと誰かの関係性が動いていくから。ただそれだけで何かを感じ取ることができます。その場所に嘘は存在しないのです。怒っているのか、悲しんでいるのか、楽しんでいるのか、その場で生まれた関係性が生で伝わってきます。

誰しもきっと何かしら、無意識もしくは意識的に「演じること」で、人とコミュニケーションを取り、バランスを取って日常を積み重ねて毎日生活をしています。自分をさらけ出し他者を理解しようと努力をし、本気で人と向き合っていく。そんな人間本来の姿が演劇にはあると思っています。朝起きて、ご飯を食べて、仕事に行って、帰ってきて、お風呂に入って、寝る。そんな毎日を繰り返し重ねていく日常。「演劇」とはそんな誰にでもある日常をちょっとだけ切り取って、違う角度から見て、演じてみること。そしてそれを見て、同じ時間を共有する空間が「劇場」です。果たしてそこにはどんな時間があるのでしょう？

こんなに面白い表現者が集まっている舞台芸術は他にはない、だから私には演劇でないとだめなんです。そして演劇は決してたまたま出会った人だけが楽しむものではなく、すべての人にその可能性があると信じています。これからも創る側と観る側の両方が「楽しそう」と思えるような時間を共有するために、この高知で活動を続けていきたいと思います。

おかむら　みき
高知演劇ネットワーク演会にて二〇一〇年より代表を務める。
高知市青年センター勤務。

地域に根差す活動の未来
―CONNECT 2 CREATE―

筒井　亮太

「お金」と「人」

夢や理想は人の生を豊かにするかも知れないが、当然それだけでは生きていけない。これは個人の話だけではなく、組織や集団においても同様である。組織の維持・発展には、どうしても現実的な問題を超えていかなければならない。

文化芸術活動を行う団体にも勿論、お金や人といった現実的な課題はある。近年、国や地方自治体では文化活動の保護、継承、促進が唱えられ、高知市においても市民団体やNPO法人などの文化芸術活動が盛んになっている。それらの組織が、活動拠点を持てば家賃や維持費が、人を増やせば人件費がかかり、頭を悩ませることも大いにあるのではないだろうか。

このような文化芸術活動団体の現実的な運営について、二〇一四年三月二十一日、江ノ口川沿いに並ぶ藁倉庫をリノベーションした多目的スペース「蛸蔵」を会場に、「CONNECT 2 CREATE 地域の劇場とアートセンターの未来を探る」と題したセミナーを開催した。

地域に根差した活動をしている三名をパネリストとして招き、それぞれの事例を通して今現在の運営のヒントを得る、ひいては地域の文化芸術活動のこれからを考える、というものだ。

対象が限定的といえるこのセミナーだが、四十名の聴講者が集まる成果を得られた。文化芸術活動団体の代表者や文化施設の関係者、地元表現者など、文化に関わる様々な人々で満席となった会場の様子に、高知の文化の未来を真剣に考える人がこんなにもいるのだと感じた。

三名のパネリストは、松山の「シアターねこ」の鈴木美恵子さん、岡山の「IDEA R LAB」の大月ヒロ子さん、青森の「十和田市現代美術館」の藤浩志さんで、いずれも各地域に拠点を持ちながら文化活動を長年続けている方々である。現在の課題、運営方針、理念、そしてこれからのことを、力強く和やかに語る姿は、決して平坦ではないだろう道のりを楽しんでいるようだ。

人とつながること

「地域の文化活動のために拠点を作る必要がありました」と語るのは鈴木美恵子さん。NPO法人シアターネットワークえひめに所属し、「シアターねこ」という劇場を拠点に活動を続けている。

シアターネットワークえひめは、舞台芸術を軸に地域の芸術文化の発展と活性化を目的として二〇〇七年に発足した、地元愛媛の文化活動を支える団体である。

シアターねこという拠点ができる以前、松山の劇団や表現者の発表の場所は公共ホールのみであり、千人という収容人数の規模は、地元の人が使うには大きすぎた。芸術文化が東京一極集中している日本の現状では、地域に根差した芸術文化の拠点が無ければ、表現者は勿論、地元文化の次代を担う若者たちも育てることができない。そのために鈴木さんは、拠点を得ることの重要性を人一倍感じていた。

しかし、拠点を持つことには多くの壁を乗り越えていかなければならない。実はシアターねこは三つ目の拠点であり、七年間で二度の転居を経験しているという。経費削減のため、古ビルや倉庫を安く借りていたが、騒音や耐震性などの問題で長くは居られなかったそうだ。

また、文化活動に対する関心、理解の差も障害になり得る。現在の拠点であるシアターねこは、市街地の近くにある幼稚園を改修したものだが、大家さんは演劇や舞台芸術に明るくなく、合意を得るまでに約四カ月を要したという。また、過去二つの拠点よりも割高な家賃、人件費などの運営面の新たな課題を解決していく必要があった。

そこで急遽立ち上げたのが、「シアターねこサポーターズ倶楽部」である。もともと演劇関係者とのつながりはあったものの、それ以外にも地元に根差した劇場を欲する多くの声はあった。そこで、広く一般に向けて広報活動を行い、金銭面や人的なサポーターを募った結果、二カ月で八十万円という寄付金を得られ、会員の多くは演劇関係者以外で構成することができた。

「本当に無謀でした」と鈴木さんは語るが、長く丁寧な活動と人との深いつながりが、今日の活動を支えていることは間違いない。収入は貸館事業が大きくウェイトを占め、地元表現者に劇場や稽古場を利用してもらっている。舞台芸術以外にも文化祭などの地域交流を念頭に置いた事業を展開しているが、それでも「何とか経費を賄えている」という状況は続いているそうだ。NPOの理事や演劇関係者で組織した「ねこの手クラブ」の無償の協力を受けながらも、基本的には自分が常駐して来場者への対応を行うなど、できるだけ自ら動くことで経費を削減していると話す。

しかし、地域の人に親しまれる「気になる劇場」となること、またアートをやる人がアートで食べていけるような雇用の創出の力になりたいと話す姿は、愛媛の文化の未来をしっかりと見据えており、シアターねこはこれからも地域の拠点であり続けるだろう。

見方を変えること

IDEA R LABは江戸時代に干拓をしてできた街、玉島にある。限界芸術のような建物が並ぶ通りの一角、実家を改修した「ラボ（実験室）」から、大月ヒロ子さんは様々なアートプロジェクトをプロデュースしている。

最も大きな取り組みは、身近に手に入れられる廃材をアートに変える、クリエイティブリユースである。通常廃棄されるゴミを活用することで、モノの見方や価値観を揺るがし、新しい個性の創造を促すというもので、全国様々な地

域で活動が行われている。

大月さんは、このクリエイティブリユースの活動を通して、新たなネットワークづくりを目標にしている。それは、「小さな循環のあるコミュニティ」の形成であるという。廃材を地域の人から受け取ること、他人と一緒にアートを生み出すこと、またラボや玉島に来てもらうこと、これらを孤立、分離したものとせず、人とモノの循環を「自分のできる範囲、無理のない範囲」で続けていくことが大切だと語る。

ＩＤＥＡＲＬＡＢは有限会社イデアという会社の一プロジェクトであるが、金銭的利益は全くないという。助成金を申請したこともあるが、報告書の作成や遠方の会議への出席など、逆に人件費や経費がかさむという事態に陥ったそうだ。手間やお金をかけず、余計なものが生じない範囲でしか活動しないということも一つのやり方であると感じたと話す。

ＩＤＥＡＲＬＡＢには宿泊の空間も整備されている。一人一泊二千円は、ほぼリネン類のクリーニング実費である。お金をかけないという方針は、このような利用料にも反映している。玉島に滞在してもらう中で街の人とも交流が生まれ、地域内外で玉島の良さを発見し共有する関係が築かれているという。

他にも、施設の解体、改修をワークショップで行うという試みも行っている。工夫やアイディア一つで、経費を削減しつつ皆が楽しさを共有できる企画を生み出している良い事例であるといえる。

大月さんは、最後に別視点の活動方法を提案してくれた。それは、通貨にばかり頼りすぎない活動である。「できること」と「できること」の交換や、小ロットのものを作り、小ロットのものを消費すること、営利か非営利かという考え方ではなく、自分のできる範囲のことを、それぞれ皆がやることである。つまり、金銭を中心に考えたときのボーダーを超える仕事である。今後この「仕事」が増えてくれば、モノや情報は地方に分散していく時代に進むという。

いつか玉島がクリエイティブな地域となる、その先駆けに自分たちがなれれば良い。ただ、まずは町おこしといった大きなことは考えず、皆が好きなことをやり、その中で人やモノの交流と循環が生まれるような活動を続けていきたいと締めくくった。

積み重ねること

美術家でありアートマネジメントも手掛ける藤浩志さんは、運営に必要なこととして、まず「場づくり」と「仕組み」の両輪である、と話された。

この考えに至る最初のきっかけは、演劇活動にあったという。かつて参加した国際演劇祭という「場」には、必ずしも劇場で公演をしないという「仕組み」があり、自分たちの表現も新たな展開を見せた経験があった。

つまり、面白い「場」と「仕組み」は参加者や表現者に豊かな発想をもたらすのだ。そこから、「美術展に、果たして美術館は必要なのか」という観点を得たと話す。

藤さんは、当時の自宅や実家を改装し、展覧会や写真展、ライブ、彫刻展などを開催し、多くの人と出会い、つながりが生まれる「場」を作り上げてきた。この時に、お金をかけなくても工夫次第で面白い「場」と「仕組み」は生み出せるという意識を持ったそうだ。

その後は、鹿児島にある複合ビル「ｅ-ｔｅｒｒａｃｅ」をはじめ、福岡や大阪、東京などにも拠点を置き活動をしている。

しかし、地域で活動をしていくには、何らかの仕組みと拠点以外に、当然お金は必要になる。そこで公共施設をより活用できないかと考え、その「実験」先に選んだのが現在籍を置く十和田市現代美術館という「場」であり、生み出したのは十和田奥入瀬芸術祭という「仕組み」であった。

芸術祭の主な会場は美術館ではなく、地域にある重要文化財やホテル、遊覧船を利用し、多くのアーティストが関わるものとなった。藤さんは、この芸術祭は「実験」であり、運営費用の工面は大変だったと語るが、十和田市がクリエイティブな地域として認識される一役を担ったことは確かだ。

次に藤さんは「商品」開発に触れた。ここでの「商品」とは飲食や物販ではなく、プログラムやツアーといった事業を指す。

藤さんが副理事長を務めるＮＰＯ法人プラス・アーツは、教育や街づくり、防災、福祉といった社会の様々な分野にアートを掛け合わせ、新しい可能性を追求するという理念を掲げ活動しており、様々な企業や団体と協働で事業に取り組み、年間一億円を越える事業費をあげることができている。

これは藤さんが作り上げた「かえっこプロジェクト」という「商品」が好評を得たことをきっかけに立ち上げられた組織であり、自分の事業（＝「商品」）を、派生させ広げてゆく（＝開発）ことも運営に必要な要素の一つといえる事例である。

また、年間十八万人の来場者を記録した十和田市現代美術館は、常設展示に魅力的な作品が並ぶ。「催し物がなければ足を運びにくい」印象を持つ文化施設と異なり、観光施設として案内されやすい。常設展示という「商品」が、相手にとって分かりやすい、という流通のさせやすさを持っているからこそだと分析する。

このように、前提として面白い「場」と「仕組み」が不可欠としながらも、運営の持続性を考えると、いくつもの異なる要素を何層にも重ねていく必要があると話す。

常に新しい発想を探し続ける藤さんは、多くの「場」と「仕組み」を生み出しながら、これからもアートの第一線で活躍されることだろう。

未来を探る

これらの話は、決して成功者の立場から見たものではない。身を粉にしながら地域の文化芸術の未来を探る方々の、現在進行形の話である。

セミナー終了後も、聴講者と三名のパネリストの意見交換は続いた。それらは、教えを乞うようなものではなく、自分たちの団体や組織の未来について、何らかの有益な情報を引き出し合うようなものであった。しかし、三名がそれぞれの運営のヒントを提示したように、全ての組織に通じる正解は存在しない。自分たちの組織に合った運営が必要である。それでも、最後まで話を続ける会場を見ると、歩みを止めなければ開ける未来はあるのだと感じてしまうのだ。

つつい　りょうた
ＣＯＮＮＥＣＴ ２ ＣＲＥＡＴＥ担当。

言葉の現場から 46

褒姒の笑いのなぞ①

広井　護

井上靖作「褒姒の笑い」は思い出深い作品である。（新潮文庫・短編集「楼蘭」所収）

国語教師になりたてのころ、中学生達を授業に引きつけることができず苦悶していた。そんなとき、ふとこの物語を思い出した。大学時代に読んで衝撃を受けた作品だ。

五枚のプリントに手書きして、授業に投げ入れた。すると反応が一変した。生徒達が身を乗り出してきた。プリントは授業ごとに一枚しか配らない方式をとっていたが、先が待ちきれないと、続きのストーリーを聞きにくる生徒までいた。「生徒が夢中になる授業」がありえるのだということをこのときはじめて知った。

この作品と授業を紹介したい。何回かの連載にするつもりである。

笑わない王妃、褒姒の話は、実は私は高校時代から知っていた。烏山喜一著「中国小史・黄河の水」（角川文庫）など中国史の入門書で読んだことがあった。

古代中国の周（西周）の王妃褒姒は、絶世の美女であったが、笑うことのない王妃として知られていた。夫である幽王は、王妃を笑わせようと、あらゆる手段を講じたが褒姒は笑わなかった。あるとき幽王は褒姒を笑わせるために、異民族の襲来を知らせる烽台に火を入れてみた。大混乱が発生し、このとき褒姒がはじめて笑った。

これに狂喜した幽王は毎年のように烽台に火を入れさせる。しかし褒姒は笑わなかった。ある年、本当に異民族が攻め寄せてきた。このとき幽王は、急を国人に告げるという本来の目的のために、はじめて烽台に火を入れた。しかし、王宮に駆けつけてくる家臣はいなかった。烽台の合図を誰も信じなかったからだ。このようにして周（西周）は滅び、「春秋・戦国」と呼ばれる時代（東周の時代）が始まる。

井上靖の「褒姒の笑い」は、この伝説をほぼ忠実に再現した、文庫本で十ページほどの短編小説である。知っている話なのに大学時代、この作品を読んだとき衝撃を受けた。

文体の力に圧倒されたのである。以下が冒頭である。

名君の誉れが高かった宣王が逝くと、そのあとを承けて幽王が位についた。幽王の二年、周では都鎬京に大きい地震があった。…略…大史伯陽父は言った。――周まさに滅びんとす。…天の国を棄つる（こと）十年を過ぎざるべし。（同書）

荘重で格調の高い文章である。独特のリズムがある。この文体が主人公の褒姒を描くときに、微妙な陰影を帯びるのである。すると行間に隠された何かが、読み手にささやきかけてくるように思われるのだ。

褒姒が幽王の後宮に上がることになったのは、伯陽父が不吉な予言をした同じ年の暮れであった。褒姒の「褒」は彼女がそこに住んでいる小部族国家の名前であり、「姒」は彼女が生い育った貧しい家の姓であった。（同書）

冒頭に続く部分だが様々な「なぞ」が含まれているように感じられる。

褒姒は貧しい家の娘だったとある。貧しい家の娘が、どうして王の後宮へ入ることができたのだろうか。また国家滅亡の予言があったまさにその年に褒姒が後宮に上がったことは何かの伏線かもしれない。

さらに、「褒」は小部族国家の名前だという。だとすれば、「褒」にも国王がいたはずである。「褒」の国王と周の幽王の関係はどういうものなのだろうか。幽王はたんなる国王ではなく、王の中の王、王を統治する王、後に「皇帝」と呼ばれることになる特殊な王だったのではないか。いわば地上の神だったのではないか。…というように。

文体の魅力に引き込まれて行間を読み込んでゆくと、どうしてもある疑問に行き当たる。民話・伝説としての「褒姒の話」を読んだときには気にならなかった「なぞ」である。褒姒はなぜ笑わないのか。…という問題だ。これだけ明確な文体で描かれた物語なら、この問いに対する答えも、言葉の裏に隠されているのではないか。そう思わずにいられなくなる。

そしてこの問いは、もう一つの問いへとつながってゆく。幽王が初めて烽台に火を入れたとき、褒姒は笑った。なぜ褒姒は笑ったのだろうか。それまで一度も笑わなかったのに。

実は井上靖の「褒姒の笑い」では、褒姒は二度笑うのである。一度目は、幽王がはじめて烽台に火を入れたとき。もう一度は、異民族の襲来によって周が滅びる瞬間である。宮殿の回廊から国の滅亡を見つめながら、褒姒は声高く笑う。この笑いの意味は一体何なのだろう。

大学時代の私には、これらの疑問を解く方法がなかった。作品を授業に投げ入れることで生徒達といっしょに考えてみようとしたのである。無謀な試みだったが得たものは大きかった。

実は井上靖「褒姒の笑い」では、語り手が、物語のエピローグにおいて、このなぞに一つの答えを提示している。司馬遷の「史記」中の説話を紹介しながら、次のように述べて語り手は物語を終える。

この話（説話）に依ると、褒姒はイモリの子にされているが、泡の子であると言ってもいいし、神竜の子であると言ってもいいわけである。……この説話は褒姒が幽王の寵妃でも愛妃でもなく、いうならば、幽王の運命そのものであるということを物語っているように思われる。運命であるとすると、褒姒が笑わなかったことは異とするに当たらないようである。それが内部深く匿しもっている生命のようなものが動き出した時だけ、運命は妖しい会心の笑みを浮かべたのである。褒姒は笑ったのである。（同書）

「易姓革命」という思想が中国には古代から存在する。天命が変わるときに王朝が交代するという考え方だ。褒姒は天命の変更を直接幽王に手渡すべく天から送りこまれた超自然的存在だったのではないかとする語りである。

これはこの作品の一つのテーマであり、だからこそ最後の褒姒の笑いは、人間の営みや歴史を超越した壮絶な凄みを感じさせるものとなっている。

しかし、同時にこの物語は、伝説や説話とは明らかに異なるリアルな描写によっても語られているのである。

伝説ではほとんど語られていない、褒姒の生い立ちが語られている。この部分を生徒達といっしょに追求してゆくと、「超自然的存在＝神竜の子」とは思えない生身の褒姒の人物像が浮かび上がってくる。

褒姒の父は弓や矢をつくる貧しい武具職人だったとされている。一方母は、弓の材料である山桑を得るために、毎日のように深山に分け入っていたとある。

褒姒もまた幼い時から母と共に山にはいったが、娘時代になって、その天性の美貌が人の噂になるようになると、母は娘に家事を受け持たせ、手の荒れることをおそれて、山へ連れて行くことはなかった。（同書）

こういう部分こそ、言葉の裏を読み取る絶好の材料である。

T「『母は…手の荒れることをおそれて、山へ連れて行くことはなかった』ってあるけど、どうして手が荒れることをおそれたの？」

P「美人なのに手が荒れると傷になるから」

T「じゃ、どうして傷になったらいけないの。美人でなくてもいいんじゃない？」

P「…美人じゃないと、いい家にお嫁にいけない」

T「いい家にお嫁に行かなくてもいいんじゃない？」

P「いいんだけど、この両親はいい家に嫁に行かせたかったんじゃないかな」

P「両親は、褒姒をいい家に嫁にやって、自分達がそこから利益を得たいと思っている」

T「どうしてそう言える？」

P「お母さんは幼いときから褒姒を山で働かせている。本当は働かせたいのに、それをあきらめたのは、褒姒をいい家に嫁にやった方がもっと儲かると考えたからじゃないのかな」

P「美貌が噂になるまでは、山で働かせていたわけだし…」

T「手が荒れることをおそれたのは、すくなくとも、娘へのいたわりからじゃないってことだね」

…というふうに、「生身の褒姒」を「超自然的存在としての褒姒」とは一定区別して追求してゆくと、様々なことが見えてくるのである。

ひろい　まもる
一九五四年　高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

第66回高知市展美術体感イベント

「あなた ダビンチ ぼくピカソ」

今日は暑い！ 6月1日(日)なのに気温は30度近くになっている。あつ～い。この暑さでも、かるぽーとの前広場には人がいっぱいだ。パスポート売り場にはたくさん子どもたちが並んでいる。さすが人気のイベント！売り場の横に、お茶とお水が自由に飲めるようになっていた。のどが渇いていたから助かった～。いっぱい飲んじゃった ^^。

私が最初に行ったコーナーは「うちわに絵をかこう！」。丸いうちわに親指を入れて手に持つシンプルでかっこいいうちわなの。それに、自分の顔を描いてみた。先生はカエルの絵を描いていた。上手だったな～。次は、隣の「筆と遊ぼう」で色紙に大きく“夢”と書いてみたよ。大きく書いたから、「大きな夢なんだね、がんばれ！」ってホメてもらえてうれしかったな。自分の部屋に飾ろうかな。

あ、すごい列ができているよ。「せっこうメダル」コーナーだ。ちょっと待ったけど、妹にあげるかわいいメダルができた。さて、次はと…「毛糸で組むストラップ」コーナー。ちょっと難しいけど、赤白青のトリコロールカラーのきれいなストラップができたからお母さんにプレゼントしようかな。

友達のNちゃんは、「カメラマンに挑戦」したみたい。先生がどの構図で撮ったらきれいに撮れるか教えてくれたんだって、うらやましいな～。「村岡マサヒロ先生と4コマまんがをはじめよう!!」のコーナーでは、村岡マサヒロさんとまんがのお話ができておもしろかったんだって。

次は、Nちゃんと「楽しいキーホルダー作り」に挑戦。プラスティックの板に絵を描いてオリジナルキーホルダーを作ったよ。ちょっと失敗しちゃった～、これはお父さんにプレゼントしよう。さあ、最後は「粘土であそぼう」コーナーに行こう。粘土を触っているとついつい夢中になってしまう。泥んこあそびみたいで気持ちいいな～。大好きな犬を作って自分の部屋に飾ろうっと。

10個全部のブースを回るのは無理だったけど、今日半日でいろんな美術を体験できておもしろかったな～。また来年も絶対行こう！楽しみ～。

お母さんたちは、7階で開催中の「第66回高知市展」を見てきたみたい。絵や書、陶芸から写真まで全部で10ジャンル689点の作品を見たんだって。姉妹都市北海道北見市の美術作品31点の中に北見市長の作品があったり、東日本大震災チャリティー展もやっていて、1000円以上の募金で好きな作品をプレゼントしてもらえるんだって。私のお母さんはきれいな日本画の絵をもらってきたよ。

今日は、親子で美術に触れた充実した一日になったな～。そういえば、受付でもらったチラシによると、7月6日(日)には、小学生対象の「キッズフリーマーケット2014」があるんだって。また友達誘ってかるぽーとに遊びに行こうー。

〈パスポート販売枚数・415枚〉

CONCORD JAZZ FESTIVAL IN JAPAN 2014

2014年5月27日(火)、高知市文化プラザかるぽーと大ホールにて、一流のジャズミュージシャン3組を迎えた、コンコード・ジャズ・フェスティバルを開催しました。

今回は、世界各地のジャズシーンで無くてはならないジャズピアノの若き巨匠、ベニー・グリーンさん、日本のジャズシーンにおけるレジェンド、サックス奏者3人がカルテットを率いた7人編成のBIG3SAX、そして実力派ジャズコーラスグループ、ブリーズという、バラエティに富んだ3組の演奏をお届けしました。

1組目、ブリーズはジャズのスタンダードナンバーを中心に、素晴らしいアレンジ、そして4人編成とは思えない深みのあるコーラスワークで歌い上げました。

2組目はBIG3SAXです。3人の年齢を合わせると230を超えるという、日本のジャズシーンの歴史を歩んできた3人のサックスプレイヤーは、多くの年齢を重ねただけある重厚な演奏です。

そして3組目、ベニーさんの演奏は圧巻の一言。情熱的で、ときに豊かに響く音色は、会場の空気まで変えるようでした。

ベニーさんはその後、BIG3SAXの3人を1人ずつ迎えてのセッション、そしてラストはカルテットも加わって「A列車で行こう」を演奏し、ボリュームいっぱいのコンサートとなりました。

〈入場者数・320名〉

World Music Night vol.16 ～世界の音楽と料理を楽しむ夕べ～

2014年6月4日(水)、かるぽーと小ホールにおいて、ワールドミュージックナイトvol.16を開催しました。

この公演は市民組織「国際的な音楽交流を中心に高知を楽しくするプロジェクト」と協働で開催しているコンサートシリーズで、世界の音楽と食べ物を一度に楽しめるというコンセプトで行っています。

今回は、メインアクトにアルゼンチンのギタリスト＆シンガーソングライター、フロレンシア・ルイスさんを鬼怒無月さん（ギター）、佐野篤さん（ベース、パーカッション）、ヤヒロトモヒロさん（パーカッション）という、日本の実力派ミュージシャンにより編成されたロス・オンゴス・オリエンタレスが迎えるユニットで、さらに地元高知からはROZUP × The Ultimate Jam's、そして木曜楽団も参加した賑やかなステージです。

ロビーには日系アルゼンチンの方や、高知に在住するブラジルやスペインの方が作る南米料理が並び、お客さんはリラックスした雰囲気で演奏を楽しみました。

1組目、木曜楽団は多彩なパーカッションが入り乱れる大編成のバンドです。1曲目から一気に会場を盛り上げ、あっという間にラストまで駆け抜ける渾身のステージでした。

2組目、ROZUP×The Ultimate Jam'sは高知の女性シンガー、KENKENさんを中心に、さまざまな活動を続ける高知の実力派ミュージシャンで構成されたユニットで、こちらは聴かせるバラードからダンサブルな楽曲までを演奏しました。

そしてメインアクトのフロレンシア・ルイスさん。変幻自在のコード進行の上に乗る、印象的で豊かなメロディーは時に優しく、時に情熱的で、ロス・オンゴス・オリエンタレスの演奏も彼女の歌に合わせて生き物のように躍動します。

また今回のツアー途中から急遽加わった、バイオリン奏者のマルセロさんのパフォーマンスも圧巻で、エンディングではこれぞ南米音楽！というようなパーカッションの掛け合いを行い、満員のお客さんからたくさんの拍手と声援が届けられたステージとなりました。

〈入場者数・155名〉

高知を撮る

第30回写真コンテスト入賞作品

山里のエコ・プール

（平成25年８月　梼原町神在居）

たどころ　むつみ

今は亡き曾祖父さんが曾孫達のために谷水を引いて造ったエコ・プールで、お盆で帰省した曾孫達が水遊びに興じていた。

言論の閉塞

風俗歳時記

明治維新から十数年、近代日本の曙時代、土佐は政治に沸いていた。高揚した自由民権運動が全県ですすめられていたのである。

明治政府の官僚専制に反対し、国会開設、憲法制定、地租軽減、不平等条約の改正を求める民主主義運動がそれだった。

人々は、機会をつくっては自由を論じ、近代化を談じ、熱心に近代思想を学習し、自らの言論のために新聞を発行し、討論会、演説会を開いて運動を盛り上げていった。まさに「自由は土佐の山間より」といわれるように、高い理想を掲げた自由民権運動が全県で展開されていただけでなく、日本における民権運動のリーダーとして、高知県はその先頭を走っていたのである。

現憲法の作成に大きな影響を与えたといわれる植木枝盛の憲法草案もそうした運動の成果の一つである。植木の憲法案は、私擬憲法中で群を抜く民主的な憲法草案で、人権保障を重視し、主権在民を徹底させ、詳細な自由権、さらには抵抗権、革命権にまで言及したもので、今日から見ても極めて民主的な内容のものである。

これが、今日の憲法をつくるにあたって参考にされたことはよく知られている。さまざまの論議はあるが、制定の過程を冷静に検証してもらえば分かることだ。自由民権が土佐の誇りになっているのは、このように理論と実践の先進性からいって当然である。

現在の土佐にその気概があるかというと。どう答えたらいいのだろうか。話が急に小さくなって恐縮だが、土佐電鉄の「護憲」広告の拒否や、五月一日の高知新聞の報道における県教委や自治体の『護憲、反原発』の集会・イベントなどの後援拒否増の傾向など、もっとおおらかな対応があっていいのではないか。少し狭量（失礼）すぎるのではないか。佩々諤々とまでは云わないが、波紋を広げるほどの言論が活発に行われてこそ民主主義は健全なものになる。言論の閉塞は民主主義とはなじまない。

（霖）

第64回 高知市夏季大学

●7月28日（月）
「一瞬に生きる」
NHK解説者／侍ジャパン代表監督　小久保裕紀

●7月29日（火）
「経済から考えるエネルギー転換の課題」
立命館大学国際関係学部教授　大島堅一

●7月30日（水）
「アジアの中の日本」
評論家　金　美齢

●7月31日（木）
「地球環境を救う新しいライフスタイルへ」
淑徳大学人文学部教授／工学博士　北野　大

●8月1日（金）
「女優百貨店」
女優　戸田恵子

●8月4日（月）
「女性の力と日本の未来―自分の道を切り拓く3つの秘訣」
明治大学情報コミュニケーション学部教授　牛尾奈緒美

●8月5日（火）
「「親ばか」のススメ―子どもの才能を引き出す法則とは」
ピアニスト辻井伸行氏の母　辻井いつ子

●8月6日（水）
「2020東京オリンピック・パラリンピックと高知の活性化」
元東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会CEO　水野正人

●8月7日（木）
「開創1200年―家田荘子とともに四国八十八ヵ所巡り」
作家／高野山真言宗僧侶　家田荘子

●8月8日（金）
「悩み方の作法」
精神科医　和田秀樹

■日時
7月28日(月)～8月8日(金) 18:30～20:00
〔土・日曜日は休講の10日間〕

■会場
高知市文化プラザかるぽーと大ホール

■料金
通し券（受講料は10日間通しの料金です。）
一般3,600円　割引2,600円

■お問い合わせ
高知市文化振興事業団　088-883-5071

今号の表紙

「キリン」

山口美月

キリンのきらびやかさを、キラキラした色合いで表現しました。

（やまぐち　みづき／
国際デザイン・ビューティカレッジ２年生）

出演者大募集！

公共ホールと地域の表現者が連携し、高知の**演劇文化をさらに発展・推進**することを目的とした、演劇合同公演の出演者を大募集！

作・演出は**関西小劇場界の雄**、南河内万歳一座座長の**内藤裕敬**、客演に同劇団の実力派俳優、**鈴村貴彦**を迎え、公募による高知の演劇人とがっぷり四つの演劇制作を行います！応募資格は一八歳以上の**真剣に演劇に取り組む**男女！オーディションは八月二四日（日）に開催、八月下旬から稽古を開始、そして本番は十月十八・十九日高知市文化プラザかるぽーと小ホールで上演！詳しくは高知市文化振興事業団（088-883-5071）もしくはかるぽーとホームページまで！

風俗

ダイエット

『ためしてガッテン』の「計るだけダイエット」の再放送を見て、少し肥満気味な連れ合いが三カ月を目標にダイエットを始めた。わたしはこれ以上体重を減らさずに、醜く出始めたお腹を一〇センチ引き締めるために体重と胴回りをついでに朝晩計ることになった。

旅行や外食をすると、下降気味だったグラフもすぐ元の数値に戻りガックリしてしまう。「計るだけ」では心もとないので、最近読んだ糖質制限ダイエットも同時進行する。ご飯やうどん、蕎麦といった炭水化物を制限するというものだが、夜だけ糖質制限するゆるやかな形で始め、それ以外は何をどれぐらい食べてもいいということにした。

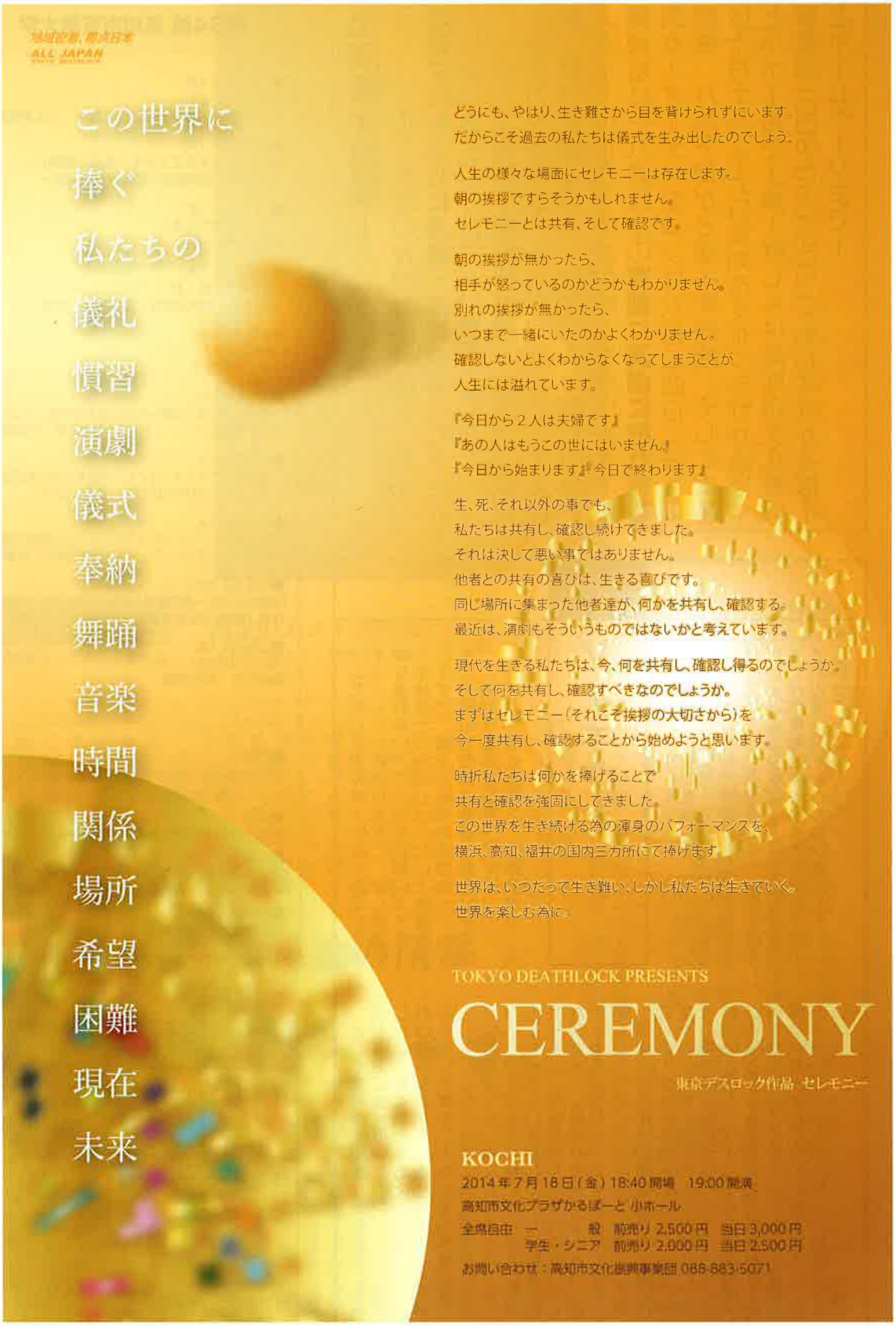
ところが糖質制限をし始めると、あれほど普通に食べていたパンだとかご飯がしだいに無くても済むようになった。これは糖質制限からみると結構なことだが、おいしい食事をしてたとえ満腹感を得ても、なんとなく食事に満足感が伴わない。なにかが足りない感じなのである。足りないといえば炭水化物だが、必ずしもそうともいえない気がしていた。糖質を制限すると「神経細胞が不活発になりウツ症状が出たり意欲が減退する」という意見もあるようだが、やはり自分の身体に訊くしかない。

考えてみるにあの満足感のない感じは、これまで何十年も続けてきた「主食、副食」という食生活をガラリと変えたことへの精神的な抵抗があるからなのかも知れないと思う。ダイエットの効果のほどはさておき、ともかく毎日体重を計り糖質を制限することで、なによりも食事の質や内容、そして自分の身体に自然に関心が向いてくるようになった効果は大きい。

（霖）

文化高知 No.180 [隔月発行]
2014年(平成26年) 7月1日発行

公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869



http://www.kfca.jp
e-mail kikaku@kfca.jp